
司馬懿仲達の憂鬱

墮落論

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

司馬懿仲達の憂鬱

【Nコード】

N2154Y

【作者名】

墮落論

【あらすじ】

しまだ ひさし

司馬田尚志は冴えない中年オタ、離婚届を提出した帰りに普通じゃない事故に巻き込まれてしまい死を迎えるが、その普通じゃあない事故の張本人によって自分が書いていた二次小説の元になる世界に転生させられてしまう。

自分が知っているゲームとは微妙に違っている世界……でも自分が知っているキャラ達は多数登場する世界…姿は若者、精神は親爺の主人公の明日はどっちだ

プロローグ（前書き）

この小説はオリキャラ主人公&筆者の観念世界での話と言う事で、その辺りが苦手の方はご遠慮して頂いた方が良いかとは思われます。それでも良いよ。という優しい方はお目汚しかとは思われますがお付き合いくださいませ。

御批評、苦言応援等ございましたらどんどん頂けたら幸いです。皆様からのコメントが筆者の成長につながります。皆様では拙い物ではございますが宜しくです。

ブローグ

「司馬田さあ〜ん、司馬田尚志さ〜ん……」

事務的な声が部屋に響く。ここはうどんで有名な某地方都市の市庁舎の市民課である。

司馬田と呼ばれた男は年齢は40半ばであろうか、くたびれたスーツ姿で、何処か人生に疲れたと言う表情で先程名前を呼ばれた窓口に向かい、係りの者から書類の様な物を受け取る。

受け取った書類を、これも書類発行の際の料金を払う時に一緒に受け取った市庁舎の名前入りの封筒に入れながら、彼は一階ロビーを通り抜け玄関から外に出る。

市庁舎から退出し駐車場に置いてあった車に乗り込みネクタイを緩めると車を発進させた。

「はあ〜っ……」

市庁舎前の交差点で信号に捕まった彼は大きな溜息を一つ吐き、カーステレオのCDトレイから半分ほど顔を出しているCDにチョンと触れた。少しの間を置いてカーステレオからはいつも好んで聴いている80年代ポップスが流れ出した。

「婚姻届を出した時もあったんですが、紙切れ一枚で簡単に家族になつたり他人になつたり出来るもんなんですねえ……」

青信号を確認し、まるで誰かに話しかけるかの様に独り言を呟きな

がら車を発進させる。

「さて……離婚届は受理されましたし後は午後から家裁で子供達との面談の日取りと養育費の相談ですか……どうせあちらは弁護士さんのみの出席でしょうから……気が重いですねえ……」

今日は休日となっっている自分の職場に向かいながら、車を走らせている途中に建っている地方裁判所を横目で見て心底ダルそうな口調で、また独り言を呟いた。

車内で今後の事を考えながら胸元から取り出したセブンスターに火を点けようとした時に、突然車のフロントガラス一杯に真っ白な鳥の羽根の様なものが拡がって視界を覆う。

「へっ……？　何なんですか……？」

驚愕で素っ頓狂な声を出した身に次に起こった事は、ドスンと何かが車のボンネットに落ちて来たかのような感覚

「えっ？　ええっ……？　うわあっ！！」

そして何が何だか分からずに、真っ白な視界を振り切ろうとして慌ててハンドルを切った直後、凄まじいまでの衝撃が彼の車を横転させる。その衝撃はシートベルトをしていなかった彼を、いとも簡単に車外に放り出して二度三度と路面にバウンドさせる。

彼は一度目の路面との接触で頭部を強く打ち、二度目三度めの接触では、衝撃で折れた肋骨が、どの臓器かは判別出来ないが刺さったのである。激痛に、自らの死を否が応でも理解した。

「何なんですか今は……………それより……………もう多分駄目でしょうねえ……………将太、愛香……………ごめんなさい……………お父さんは……………」

薄れ行く意識の中で子供達の事を思い浮かべる一方で、混濁する意識の中では

「ああ……………そう言えば部屋の掃除もしてませんでしたねえ……………床にはエロ本が散乱している筈だし……………パソコンも二次小説書きっ放しでシャットオフしてませんね……………」

どうでも良い様な事を考えつつ彼の意識は途絶えた。

プロローグ（後書き）

どうも墮落論と申します。

初投稿となりますがいかがでしたでしょうか？

今後とも細々と続けて参りたいと思いますのでどうか宜しくお願い致します。

プロローグ 2 真実

「……………せんか？ ……さん、……………さん」

誰かが自分に向かって話しかけている声に反応する様に意識が徐々に戻って来る。未だ混濁した意識ではあるが、先程自分の身に何が起こったかはハッキリと覚えている。

（取り敢えず声が聞こえると言う事は生きているみたいですね……………体の感覚が何か変な感じですが、まああれ程の距離をフツ飛ばされればねえ……………兎に角、生きてて良かったと言う所でしょいか）

だんだんと覚醒しつつある意識で彼はそう考えた後、ゆっくりと目を開けようとした時に、いきなりハッキリと声が聞こえた。

「まあ、そう考えたいのはヤマヤマでしょうが、残念ながら貴方は既に死んでいます」

「はいっ？」

唐突に聞こえて来た声に思わずゆっくりと開けようとした目を見開き、寝たままの状態で見回す。意識の片隅で何処かの病院の一室である事を期待していたが、淡い期待を者の見事に打ち砕く様に辺りは暗闇で覆われていた。

「此処は……………何処でしょうか？」

「まあ、貴方達の世界の分かり易い言葉で言うのなら『死後の世界』ってやつですかねえ」

呆然自失となった状態で口から出た独り言に、すぐさま答えが帰って来た事で、もう一度だけ目の動きだけで辺りを見回してみたが、先程から答えを返してくれる者の姿は確認出来ない。

「えつとお……何から聞いたら良いのか……取り敢えず私はどうなってるのでしょうか？」

通常時なら錯乱して喚き散らしてもおかしくない状態であると言うのに、今は現状把握を最優先するべきと考え直した結果。彼は場の空気を読んで最適な質問をした筈なのだが

「貴方……変な方ですねえ……大抵の人間は、こういう状態に陥ると著しい恐慌状態を引き起こすものなんですけどねえ……失礼ですけど貴方、生前に天然だとかズレてるとか、他人から言われてませんでしたか？」

返って来た答えがこれである。返答の際の生前と言う単語が妙に生々しく感じられたが、それはこの際置いておいて、彼は微妙に痛む頭で言葉を返す。

「確かに喚き散らしたい衝動はありますが……私としては出来るだけ今現在の状況把握をしたいが為の質問のつもりだったのですが、何かおかしかったでしょうか？」

「ふむ……良く言えば落ち着いている、或いは達観しているとでも言うのでしょうか……未だ天然ボケの疑いを捨て去る事が出来ませんねえ……」

「何か非常に酷い事を言われていると思うのですけれど、兎に角現

状の説明をお願いできませんか？ それを聞いた上で、錯乱して暴れるなり、絶望して泣き喚くなりしようと思えますので……」

「（やはり変な人にちいかいかも……）そうですね、客観的な事実を申し上げますと、司馬田尚志さん、貴方は不幸な事故でお亡くなりになりました」

「はあ……不幸な事故ですか……」

「はい、不幸な事故です。我々の主、貴方達が神と呼び崇め奉る御方が下界に降臨された際の、ちょっとした手違いに貴方が巻き込まれた形になってしまったのです……本当に申し訳ありません」

それまで事務的に話していた声の主の口調が事故の謝罪の際には悲痛さが感じられる声に変わっている事が、これは間違いなく真実の事であろうと彼を納得させた。

「そうですか……まあ人である自分には分からない世界の事ではありますが、主が降臨されたと言う事は余程の大事だったのでしょ
うね……」

「はあ……まあ……その……」

何故だか相手の口調が急に齒切れの悪いものとなってしまう事に、若干の嫌な気持ちを感じつつ先程より詰問口調で問うて見る。

「もう一度御聞きますが余程の大事で貴方の主は降臨されたんですよね」

「……………」

「何で無言になるんですか？」

「いやあ……あのお……大変言い難い事なのですが……今回我が主が此の地に降臨されたのは……そのお……貴方が言う様な大事では無く……えゝとですねえ……天界るるぶに掲載されている程の『さぬきうどんの店』に行く為だったんですよ……ハハハ……」

「はああああああつ？」

事故の真実と声の主の渴いた笑い声を聞いた彼は、あらん限りの声を張り上げた後、あまりのショックの為にまたもや意識を失ったのであった。

プロローグ 2 真実（後書き）

どうも墮落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』プロローグ2をお届けいたしましたが無如だつたでしょうか？出来るだけ早くプロローグを終了させて本編に入りたいと思いますので今後ともどうか宜しくお願いします。

プロローグ 3 提示

「……っ、うつっ……うつっんっ……」

（何か悪い夢を見た様な気がしますね……うん、悪い夢です。神様つてのが居るって事は良しとしましょう……ですがその神様がうどん食べる為に降臨するなんて……何処の『聖 おに さん』設定ですか……そう、これは夢です。此処の所離婚調停等で疲れていた私が見た夢なんです。ええそうに決まっています）

混濁する意識の中で、彼はそう考えて今度こそ本当の世界へと希望を抱きながら目を開けようとした時、

「いや、現実逃避をされるのは結構なんですが……何度気絶されても司馬さんが死んでいると言う状況は変わらないですよ」

宛ら全ての希望を打ち砕くかの様な声が聞こえて来る。何とは無く理解はしていたが、改めて突き付けられた事実に対して非常な理不尽を感じて声を荒げてしまう。

「何を他人事のように仰っているんですか？　そもそも貴方の主が、うどんを食べたいが為に下界に来なければ、今此処に私はいない筈じゃあないですか……！」

「まあその事に尽いては我々天界も甚だ遺憾には考えているのですが、我々は決して今回の不幸な事故を他人事などと無責任な事はちつとも思っていないですよ。それ故、事態収拾と事後協議の為に態々大天使の私自らが天界から派遣されて来たのですから、人の身でありながら光栄だと思っただけです」

「えーと……甚だ遺憾であると言う政治家の様な答弁とか、貴方が大天使であるとか、事故の張本人である貴方方が何故上から目線なのか等、ツツコミ所は多々有るのですが……………」

「それがどうかいたしましたか？」

言外に何か文句があるのかともいう雰囲気を漂わせた相手の言葉に彼は、もうどうでもよくなってきて投げ遣り気味に言葉を返す。

「いえ、これ以上不毛な会話を続ける事は精神衛生上良くないって事だけは理解が出来ました……………で、事態収拾と事後協議と言う事ですが、結局私はこれからどうすれば良いのでしょうか？」

「ほう、御理解が頂けたようで幸いです……………もう少し錯乱状態で抵抗を示すかと思っていたのですが……………司馬田さんって、やはり少し人としてズレていませんか？」

「貴方は話を纏めに來たのか、私の事をからかいに來たのかをハッキリとさせた方が相互理解の為に宜しいのではないかと思います……………」

「いやいや、これは失礼致しました。でも突発的な事故でお亡くなりになったのに、此処まで冷静な方は本当に珍しいんですよ……………まあそれはさて置き本題に入りましょうか」

「やつとですか……………あんまり前フリ長いとSS読者にソッポ向かれてしまいますよ」

「ハイ、其処の死人、メタ発言禁止!!」

「何で天界の大天使とやらがメタ発言なんて言葉知ってるんですかっ!？」

「まあ、近頃为天界は何でもアリですからね……と、言う訳で本題に入ります。突然ですが貴方には転生して貰います」

「はいいつ？」

「転生ですよ。テ・ン・セ・イ。分かりますか？ 転生!! 貴方が望んだ世界に転生して頂いて、我々天界が付与したチート能力全開で「そりゃあもう大騒ぎさっ、イエーイ!」ってな具合で新しい人生を楽しんで貰おうと言う事で……オケ？」

「いやいや……オケ？ って……そんな軽いノリで言われても、元の世界に生き返るって事は出来ないんですか？ 私つい最近離婚が成立しましたんで将太に愛香、二人の子供達の養育費も払っていかなければならぬんですよ……」

「ああ……言い難いのですが生き返るのは無理ですね……だって貴方の遺体はもう茶毘に付されましたし、貴方が死んだと言う事をかなりの人が認識しているんですよ。それらの認識を全部書き換えて貴方の人生を再構成するなどと言うプチ創生なんて、ぶっちゃけ面倒くさいだけですし……」

「面倒くさいって……そもそも貴方達の手違いでしょうが」

「それについては重々申し訳ないとは思っていますが、実質貴方一人を生き返らせると貴方が死んでから以降に出生した新たな命を全て無かった事にしなきゃいけないんですよ……そんな悪魔の様な所

業を貴方は望むんですか？」

「ぐっ……」

「ですからここは一つ貴方に我慢して頂いて快く転生して頂けないかなあと、我々は思う次第でありまして……勿論転生した世界での身の安全及び快適なセカンドライフは天界が保証しますよ」

「二人の子供達の養育費は……私がそれを払えないとなると元妻と子供二人の生活の心配が……」

「それは無問題です！！ 貴方が御子さん二人を受取人に行っている生命保険ですが此方の方で手を加えておきましたので、毎月30万円程は奥さんの口座に入る様になっていますし、貴方の両親にも同額が振り込まれますよ」

「貴方はうちの家族を全員ニートにでもするおつもりですか？」

「まあそこは天界からの誠意と言う事で御納得を頂いて、如何でしょううか後顧の憂いも無くなった事ですし、ここは一つ快く転生して頂けませんかねえ」

そう言った声のトーンは大天使と言うよりは、自分が加入した生命保険のセールスレディに近いなあと、彼は現実逃避が半ば入った状態でぼんやりと考えていた。

プロローグ 3 提示（後書き）

どうも墮落論です。

『プロローグ 3 提示』を書かせて頂きました。

次回でプロローグ終了いたします。

今後とも頑張りますので宜しくお願い致します。

プロローグ 4 旅立ち

「はあっ……何と無く釈然とはしませんが、ここは黙って貴方の言う通りに転生した方が話が早く転がりそうですね……そろそろ本編に行かないと評価ポイントにも影響が出て来るでしょうし」

少々と言った表情で尚志は大天使が言った転生話に了承の意を示した。

「誰に向かつて話してるか……何て事は今更なので突っ込みませんよ。それよりもその答えは転生受諾と捉えても宜しいのですね」

「ええ、どのみち二度と子供達に逢う事が出来ないのであれば、この世界に未練は無いですからね……ところで私はどう言った世界に転生させられるのですか？ 先程の話ではチート能力の付加と身の安全は保障されると言われてましたが……」

「はい、我々天界が貴方の望む様な「俺様、T u e e e e e e
！」的な力を付与しますので、貴方自身が死ぬ羽目になる様な事は
余程の事が無い限り発生しませんよ。それでどの様なチートを御望
みでしょうか？」

「どの様な……と、言われましても、行く先が何処か分からなければ、能力の御願の仕様が無いじゃあないですか」

「ああ、それもそうですねえ……ではお教えしましょう。今回貴方が転生して頂く世界は……ズバリ『真・恋姫＋無双』の世界です。どうです嬉しいでしょうヒューヒュー」

大天使と名乗る声は、そう言うと頭の悪いアイドル司会者の様に囁し立てる。

「あのお……」

「ん？ 如何しました？ 何か転生先に御不満でもございますか？」

「いや……不満と言うよりは、何故に『真・恋姫†無双』の世界……
…なんでしょうか？」

「えっ、だって貴方の事を知る為に部屋を見に行かした織天使からの報告では、貴方の机上には恋姫のエロゲーに三国志関連の資料が散乱し、床には恋姫関連の同人誌、それに何よりもPCには貴方ぐらいの年齢の方が書くには、相当痛くてキモイ二次小説が書きかけのままだそうじゃないですか」

「い……い、痛くてキモイ小説……ですか」

「いやまあ、その辺りは個人の見解の相違って奴でコメントは差し控えさせて頂きますが……ここまでされるのであれば相当お好きなんでしょう、その世界が」

「あのですね……私は恋姫が好きと言うよりも、ただ単に恋姫が題目として案外書き易かったから書いてたんですが……」

「何ですって……では山と積まれた三国志関連の資料と床に散らばる18禁恋姫同人誌は？」

「まあ、いくら二次小説とは言え嘘八百は書きたくなかったんで、それなりに資料は集めましたし……後、18禁本は……単なる

自分の性的趣向です」

最後の方で尚志の声が小さくなってしまったのは御愛嬌と言ったところか。

「おやおや、これは困りましたねえ……我々は貴方の部屋の状況から鑑みて転生先は恋姫の世界しかない判断したので、他の転生先など用意しなかったんですがねえ……」

「別に恋姫の世界自体が嫌いな訳では無いですから、其処に転生させて頂ける事については吝かでは無いのですが……」

「いやに奥歯にモノの挟まった様な言い方をなさいますねえ」

「いや、先程のチート機能の件なんですがね……転生先が恋姫の世界と言うのなら、貴方方が提案された「俺様、強ええええ!!」的な要素は私的には不要かなと思ったものでして」

「その訳は……伺っても宜しいですか」

「ええ、大した訳でもありませんからね……まあ何と言うか、恋姫のどの辺りに転生させていただけるか全く分かりませんが、乱世である事は間違いないのでしょうか？」

「まあ、そうなりますねえ」

「いくら転生者と言っても転生世界の摂理を無視した様な武力は、やがて自分や周りの世界を壊して行くように思えますよ。それならば超人的な武力などよりは知力や魅力の方を私は望みます、まあ何よりも私には戦場での縦横無尽の働きなぞ出来そうに無いですか

らね」

「ふむ……まあ、それが貴方の御考えであるならば重視させていただきますが……ならば貴方に対しての付加は統率力、魅力、知力、政治力……後は『主の祝福』と……」

「何ですか？ その『主の祝福』ってのは……」

「ああ、これは先程からの話に出ている貴方の転生先での命の保証ですよ。これがあれば何があっても貴方は死ぬ事はありませんし、勿論、大怪我ひとつ負わずに新たな人生を送れますよ」

「ん……」

「どうしました？ まさか貴方『主の祝福』までも要らないと言うのでは無いでしょうね！！ 貴方がこれから転生する先は乱世なんですよ！！ 貴方が考えているよりもずっと『死』と言うものが現実的な世界なんですよ」

「ん……確かにそうなんですしょうがねえ……チート機能付けて貰って言うのもなんですが、転生したら少しは前向きに生きようと思っんですよ……それこそ日々を一生懸命にね……」

「……………」

尚志の揺るがない決意に大天使は返すべき言葉を失ってしまい、暫し重苦しい沈黙が辺りを支配する。どのぐらいの時間が経ったであらうか、

「……………御考えは変わらない様ですね……………」

「ええ、折角の御好意ですが申し訳ありませんねえ」

「分かりました、出来るだけ貴方の御要望に沿える様に致しましょう。全く……やはり貴方は変な方ですねえ」

大天使の声は、そのものが天からの福音の様に神々しく辺りの空間に響き渡る。

「さてと粗方自分の要望は聞いて貰えるようですから、安心して新しい世界に旅立たせてもらいましょうか」

「まだ細かい所の説明やお伝えしなければならない事が多々有るのですが……」

「もう充分ですよ。それに……」

「それに……？」

「自分の新しい人生ですから、手探りで成長を感じていきたいじゃないですか。だからこれで充分なんです、さあ、早くあちらの世界へと送って下さい」

「やっぱり変ですよ、貴方……でも短い時間でしたが貴方とお話して感じてられた事は、今迄の遣り取りは実に貴方らしい……と言う事でしょうか、それでは司馬田さん、今一度目を閉じて下さい」

「はい……」

「ゆっくりと気を落ち着けて……はい」

不思議な事に尚志が目を閉じた途端に急速に尚志の意識は混濁して行き、まるで風呂にでも浸かっている様な感触に包まれる。大天使の声が徐々に聞こえなくなり、寄せては返す様な波の音に変わり自らに意識が完全に途絶える時

「将……太……愛……香………幸せ……に……」

それが現世での尚志の最後の言葉だった。

プロローグ 4 旅立ち（後書き）

どうも墮落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』プロローグの最終回を書かせて頂きました。
書きながら思ったのですが、オリ主と大天使の口調がモノの見事に
被っちゃってますねえ……（苦笑）

さて次回からや々と本編です。精一杯頑張って書きますのでどうか
宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2154y/>

司馬懿仲達の憂鬱

2011年11月10日16時02分発行